機動戦士ガンダムHope
―ホープ―

彗星大佐

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ＵＣ―０１３６をもって長い戦争は終了した。

その後連邦政府は宇宙をまとめる軍［宇宙統制軍］を発足。

宇宙統制軍は宇宙の人々に危害を加える事無く時代はただ平和に進んでいった。

しかし、ＵＣ―０１５０。［宇宙革命軍］なるテロリスト集団が現れ、宇宙は再び戦争へと足を進めてしまっていた。

少女は未来に希望を灯せるか

目次

登場ＭＳ・母艦設定 ―――― 1
機動戦士ガンダムＨｏｐｅ　登場人物
～宇宙統制軍特別作戦組織アイアス編～
―――― 13
機動戦士ガンダムＨｏｐｅ　登場人物
～宇宙統制軍＆宇宙革命軍 ―――― 20
『第１話』　希望と絶望 ―――― 28
『第２話』　姉弟 ―――― 34
『第３話』　過去 ―――― 39
『第４話』　作戦前夜 ―――― 43
『第５話』　作戦開始 ―――― 51
『第６話』　父と母と ―――― 58
『第７話』　大気圏 ―――― 66
『第７．５話』　セシル ―――― 75
「第８話」　地球 ―――― 80
『第９話』　名前 ―――― 84
『第１０話』砂漠の狩人―デザートハンター― ―――― 89
『第１１話』　狩人の過去 ―――― 98

登場ＭＳ・母艦設定

機動戦士ガンダムＨｏｐｅ　設定資料１　ＭＳ・母艦

宇宙統制軍特別作戦組織　アイアス

・Ｕ―ＴＭ―Ｇ―０００　ガンダムホープ

―装備―

６５ｍｍ対空迎撃バルカン

ビームナイフ×２

―機体説明―

宇宙統制軍が極秘に建造した

初のガンダムタイプＭＳの１機目。

装備換装システムを用いている

純白のガンダム。

本作の主人公が搭乗する機体。

・Ｕ―ＴＭ―Ｇ―００１　スラスト・ホープ

―装備―
６５ｍｍ対空迎撃バルカン
ビームライフル×２
ビームサーベル×２
ホルン×６
ビームシールド
―機体説明―
ガンダムホープの装備換装システムの内の１つ。
スラスト・シルエットを装備した
機動力重視の装備。
スラスト・シルエットに装備されている
「ホルン」という
オールレンジ攻撃が可能な特殊装備
（簡単に言うとファンネル）を持ち、
ビームライフルを２つ持っている。
スラスト・シルエットの形状はイメージとして
デスティニーガンダムの翼をイメージして貰いたい。

ホルンは翼に装備されている。

・Ｕ―ＴＭ―Ｇ―００２　カノーネ・ホープ

―装備―

６５ｍｍ対空迎撃バルカン

ビームライフル

ビームマシンガン

ガーンディーヴァ×２

肩部レールガン×２

ビームナイフ×２

ビームシールド

―機体説明―

ガンダムホープの装備換装システムの内の１つ。

カノーネ・シルエットを装備した

火力重視の装備。

ビームライフルとビームマシンガンを両方持つ。

ガーンディーヴァという腰に付いているビーム砲２つに加え、

肩部にレールガンを２つ装備している。

しかし近接攻撃武器がビームナイフ２本と
少し心もとない。
カノーネ・シルエットはブラストインパルスをイメージ。
ブラストインパルスのケルベロス高エネルギー超射程ビーム砲が
そのまま腰に来た感じのイメージをして貰いたい。
・Ｕ―ＴＭ―Ｇ―００３　シュヴェルト・ホープ
―装備―
６５ｍｍ対空迎撃バルカン
ガラドヴォルグ×２
ビームブーメラン×２
ビームナイフ×２
ビームシールド
―機体説明―
ガンダムホープの装備換装システムの内の１つ。
シュヴェルト・シルエットを装備した
近接攻撃重視の装備。
腰部に装備されている

ガラドヴォルグという巨大な対艦刀２本を装備。
ガラドヴォルグは組み合わせ不可。
遠距離武器が
ビームブーメラン２つとバルカンのみ。
シュヴェルト・シルエットはソードインパルスをイメージ。
Ｕ―ＴＭ―００１―Ｒ　ペルセウス・カスタム
―装備―
ペルセウスハルパー×２
ビームライフル
ビームブーメラン×２
ペルセウスシールド
―機体説明―
アテナに乗っているＭＳの１つ。
ペルセウスをカスタムしたもので
起動性が高まっている。
装備もビームブーメランが追加されている。
カラーリングが赤と白に変更されている。

Ｕ―ＴＭ―００２―Ｒ　ロビン・カスタム
―装備―
ビームスナイパーライフル
ビームハンドガン×２
腰部三連装ミサイル×２
ビームナイフ×２
ロビンシールド
―アテナに乗っているＭＳの１つ。
ロビンをカスタムしたもので、
スコープの倍率とロックオンアシストが
強化されている。
カラーリングが黄色と緑に変更されている。
・宇宙統制軍新造戦艦　アテナ
―装備―
１０連装ミサイルポッド×５
メガ粒子砲×２
イージスの盾

ジャミング粒子放出ミサイル×３
１００ｍｍ対空迎撃バルカン砲×４
―機体説明―
ガンダムと同時期に開発された新造の戦艦
ジャミング粒子放出ミサイルに加え、ビーム兵器、実弾兵器の威力を軽減する「イージスの盾」
を装備している。（イージスの盾の使用制限あり。）
宇宙統制軍（主人公サイド）ＭＳ
・Ｕ―ＴＭ―００１　ペルセウス
―装備―
ペルセウス・ハルパー×２
ビームライフル
ペルセウスシールド
―機体説明―
宇宙統制軍の主力モビルスーツの１つ。
近接戦闘と移動速度に特化したモビルスーツ。
カラーリングは青と白。

・Ｕ―ＴＭ―００２　ロビン

―装備―

ビームスナイパーライフル

ビームハンドガン×２

腰部３連装ミサイル×２

ビームナイフ

ロビンシールド

―機体説明―

宇宙統制軍の主力モビルスーツの１つ。

ペルセウスの援護をするための機体。

射撃距離は、パイロットの腕にもよるが、約３５０ｋｍほど。

カラーリングは黄色と黒。

宇宙統制軍　主力戦艦　ヘクトル

―装備―

１０連装ミサイルポッド×３

メガ粒子砲×２

１００ｍｍ対空迎撃バルカン砲×４

レーダージャミング粒子放出ミサイル×２

―機体説明―

宇宙統制軍の主力戦艦。

アテナの１つ前の戦艦の為、性能は若干低い。

宇宙革命軍　ＭＳ

・Ｕ―ＴＭ―Ｇ―００４　ガンダムデスペア

―装備―

６５ｍｍ対空迎撃バルカン

ビームライフル

ビームサイス

ビームブーメラン×２

腕部ジャミング粒子放出ポッド

ビームシールド

―機体説明―

宇宙統制軍が極秘に開発したガンダムタイプＭＳの２機目。

宇宙革命軍に情報が渡り奪取されてしまった

紫色のガンダム。

装備換装システムは無いが、レーダーをジャミングし接近、ビームサイスでの闇討ちを
得意とするＭＳ。
しかし、ガンダムホープと宇宙統制軍の
新造戦艦アテナはジャミングを受けない。（元々ホープと同様にアテナに乗せる機体だったため、ジャミング耐性がついている。）

・Ｕ―ＫＭ―００１　フェンリル
―装備―
ビームライフル
ビームサーベル×２
ハンドグレネード×３
フェンリルシールド
―機体説明―
宇宙革命軍の主力ＭＳ。
装備は平均的。　パイロットの好みに合わせた
装備の改造が可能なＭＳ。

・Ｕ―ＫＭ―００１―Ｒ１　フェンリルウォリアー

実体剣×２
ビームサーベル×２
ビームハンドガン
ハンドグレネード×３
フェンリルシールド
フェンリルの近接戦闘に特化したＭＳ。
ビームサーベルに加え、実体剣が２つ増え、
ビームライフルの代わりにビームハンドガンを
装備している。
・Ｕ―ＫＭ―００１―Ｒ２　フェンリルガンナー
ビームスナイパーライフル
ビームハンドガン×２
ビームナイフ×２
フェンリルシールド
―機体説明―
フェンリルの遠距離攻撃に特化したＭＳ。
近接武器が

ビームナイフのみになってしまったが、
遠距離武器が充実している。
宇宙革命軍　主力戦艦　バハムート
―装備―
１０連装ミサイルポッド×４
メガ粒子砲×３
１００ｍｍ対空迎撃バルカン砲
ジャミング粒子放出ミサイル×２
―機体説明―
宇宙革命軍の戦艦。
宇宙統制軍のヘクトルを元に作られた。
性能はヘクトルより上である。

機動戦士ガンダムＨｏｐｅ　登場人物　～宇宙統制軍特別作戦組織アイアス編～

機動戦士ガンダムＨｏｐｅ　設定資料　２　キャラクター

宇宙統制軍特別作戦組織　アイアス編

名前　セシル・ヴァイス

性別　女

年齢　１６

誕生日　ＵＣ―０１３４　８月１７日

身長１５４ｃｍ

髪色　黒

瞳の色　レッドスピネル

髪型　ポニテ

出身　フロンティアＶＩＩ

趣味　体を動かす事

家族構成　父　母　弟

搭乗機体　Ｕ―ＴＭ―Ｇ―００１　ガンダムホープ

―キャラ説明―

本作の主人公。

元気いっぱいの少女。

１６歳でガンダムのパイロットに選ばれるという天才的な操縦技術を持っている。

事故で両親を失っていて、

弟は未だに行方不明。

名前　クリス・リヒト

性別　男

年齢　１８

誕生日　ＵＣ―０１３２　１０月２６日

身長　１７４ｃｍ

髪色　赤

瞳の色　薄めのアメジスト

髪型　ウルフカット

出身　フロンティアＶＩ

趣味　読書

家族構成　父　母　姉
搭乗機体　Ｕ―ＴＭ―００１―Ｒ　ペルセウス・カスタム
―キャラ説明―
アテナの乗組員で、
ペルセウス・カスタムのパイロット。
クールで静かな青年。
あまり感情が表に出ないタイプ。
ＭＳ操縦もかなりの実力を持つ。
名前　シオン・ベガ
性別　女
年齢　２１
誕生日　ＵＣ―０１２９年　４月８日
身長　１６３ｃｍ
髪色　金
瞳の色　碧
髪型　ロング
出身　フロンティアＩ

趣味　料理
家族構成　父　母　弟
―キャラ説明―
アテナの乗組員でロビンのパイロット。
明るい性格でアテナのＭＳパイロットのお姉さん的存在。
射撃の腕はピカ１。
名前　シエル・アトライア
性別　女
年齢　２６、
誕生日ＵＣ―０１２３年　９月　３日
身長　１６１ｃｍ
髪色　茶
瞳の色　黒
髪型　ショート
出身　フロンティアＶＩＩＩ
趣味　お酒

家族構成　父　母

―キャラ説明―

アテナの艦長。

明るい性格でお酒好き。

名前　レーベ・ユーリル

性別　男

年齢　２７

誕生日　ＵＣ―０１２２年　１０月８日

身長　１７５ｃｍ

髪色　黒

瞳の色　黒

髪型　ツーブロック

出身　フロンティアＩＸ

趣味　スポーツ

家族構成　父　母　弟

―キャラ説明―

アテナの乗組員で砲撃士兼操舵士。

スポーツが好きでセシルとよく盛り上がっている。
名前　レイ・ルディス
性別　女
年齢１４
誕生日　ＵＣ―０１３６年　５月２４日
身長　１５５ｃｍ
髪色　ピンク
瞳の色　緑
髪型　セミロング
出身　フロンティアＶ
趣味　園芸
家族構成　父　母
―キャラ説明―
アテナの乗組員で戦況オペレーター。
冷静な判断でパイロット達をアシストしている。
名前　セリス・フィロ
性別　男

年齢　２７
誕生日　ＵＣ―０１２２　１２月　５日
身長　１８６ｃｍ
髪色　黒
瞳の色　黒
髪型　ナチュラルショート
出身　フロンティアＩＶ
趣味　機械いじり
家族構成　父　母　姉　弟
―キャラ説明―
アテナの乗組員で整備士。
アテナに乗っている全てのＭＳは彼が整備している。
アテナのＭＳ全てを任せられているだけあり、
技術は高い。

機動戦士ガンダムＨｏｐｅ　登場人物　～宇宙統制軍＆宇宙革命軍

機動戦士ガンダムＨｏｐｅ　設定資料　２　キャラクター

宇宙統制軍

レビル　・エイベル

性別　男

年齢　７６

誕生日　ＵＣ―００７４年　１１月２５日

身長　１７５ｃｍ

髪色　白

瞳の色　黒

髪型　ショート

出身　フロンティアＶＩＩＩ

趣味　孫と遊ぶ事

家族構成　母　父　嫁

―キャラ説明―
宇宙統制軍の総司令官。
普段は温厚な性格だが戦闘に入ると人が変わったように厳しくなる。
ミリア・ダスティン
性別　女
年齢　２６
誕生日　ＵＣ―０１２４年　４月１４日
髪色　黒
瞳の色　黄色
髪型　ロング
出身　フロンティアＶ
趣味　読書
家族構成　父　母　妹　兄
―キャラ説明―
レビルの秘書。
メガネをかけていてインテリっぽい。
実際インテリである。

アラン・バーナード
性別　男
年齢　２７
誕生日　ＵＣ―０１２３年　７月１６日
身長　１８６ｃｍ
髪色　茶
瞳の色　緑
髪型　ショート
出身　フロンティアＩＶ
趣味　映画鑑賞
搭乗機体　Ｕ―ＴＭ―００１　ペルセウス
―キャラ説明―
宇宙統制軍のパイロット。
ペルセウスを駆り敵を翻弄し倒す事が得意。
人当たりはいい。
宇宙革命軍
ダリス・ダッチ

性別　男
年齢　４６
誕生日　ＵＣ―０１０４年　５月２９日
身長　１６８ｃｍ
髪色　黒
瞳の色　不明
髪型　ショート
出身　フロンティアＶＩＩＩ
趣味　コーヒー
―キャラ説明―
宇宙革命軍のリーダー。
元は宇宙統制軍に所属していたが裏切り、
宇宙革命軍を発足した。
ギルバート・ヴァイス
性別男
年齢　１５
誕生日　ＵＣ―１３５年　８月９日

身長　１６７ｃｍ
髪色　黒
瞳の色　レッドスピネル
髪型　エアリーヘア
出身　フロンティアＶＩＩ
趣味　特になし
搭乗機体　Ｕ―ＴＭ―Ｇ―００４　ガンダムデスペア
―キャラ説明―
宇宙革命軍のエースパイロット。
そして本作主人公　セシルの弟。
事故の後ダリスに保護される。
あまり喋らず、感情も表に出ない。
ノイン・エルダー
性別　男
年齢　２７
誕生日　ＵＣ―０１２３年　９月２８日
身長　１８６ｃｍ

髪色　赤
瞳の色　黒
髪型　アシメ
出身　フロンティアＩＸ
趣味　ゲーム
搭乗機体　Ｕ―ＫＭ―００１―Ｒ１　フェンリルウォリアー
―キャラ説明―
宇宙革命軍のパイロット。
フェンリルウォリアーに乗っている。
元々は宇宙統制軍に所属し、
ダリスの部下だった。
人当たりはいいが性格が悪い。
アンネ・ワルサー
性格　女
年齢　２２
誕生日　ＵＣ―０１２８年　１２月１１日
身長　１６８ｃｍ

髪色　黒
瞳の色　ピンク
髪型　セミロング
出身フロンティアＩ
趣味　読書
搭乗機体　Ｕ―ＫＭ―００１―Ｒ２　フェンリルガンナー
―キャラ説明―
宇宙革命軍のパイロット。
フェンリルガンナーに乗っている。
１００発百中の腕を持つ。

１０００文字いかなかったから雑談。
この計画性の無さが私のうりです！
嘘ですすいませんｗ
今回男性キャラのショートが多かったと思いますが……
手抜きではありません！ｗ
なんとなくショートなイメージがあるキャラが多かったので（∀、＊ゞ）

１０００文字いったのでここで終わりにしますねｗｗ

（これは雑談と言うのか？ｗ）

『第1話』　希望と絶望

ＵＣ―０１３６年。　地球・コロニー間の長期に渡る戦争は幕を閉じた。
連邦政府は『宇宙統制軍』を発足。　暫く平和な時が過ぎていた。
しかし平和とは長くは続かない。
ＵＣ―０１５０年。　反統制軍組織『宇宙革命軍』なるテロ組織が現れる。
これは宇宙の「希望」と「絶望」が未来を掛けた戦争の物語である。

～宇宙統制軍特別作戦基地～
???「おーい！セシル～」
セシル「あっ！シオンさん！こんにちわ！」
シオン「今日は例の試運転の日だね！　調子はどう？」
セシル「んー……緊張はしてますけどダイジョブです！」
シオン「おーおー頑張ってくださいよ～
『ガンダム』のパイロットさん♪」
セシル「はい！頑張ります！」

セシル（今日は頑張らなくちゃ！　私の『ホープ』で戦争を終わらせるんだ！）

???「セシル準備はいい？」
コックピットのモニターから
ピンクの髪で緑の綺麗な目をしている少女が話しかけてくる。
セシル「問題ないよ！レイ！」
レイ「了解　ホープの射出タイミングをセシルに譲渡」
セシル「了解！　セシル・ヴァイス！　スラスト・ホープ！
行きます！」
セシルはコックピット内のボタンを押す。
するとコックピット内にＧがかかる。
セシル「んー　やっぱり結構Ｇがすごい……」
新造戦艦『アテナ』のＭＳ格納庫から輝く純白のＭＳ
『ガンダム』が射出される。
???「いい？セシル　今回の目的はホープと共に基地から射出されるもう１機の『ガンダム』と共にダミーのＭＳを破壊する事よ」

ホープのコックピット内のモニターからレイとは違う女性から作戦内容が伝えられる。
セシル「わかってますよ～シエル艦長」
シエル「そう？　なら頼んだわよ！」
セシル「了解！」
会話を終えるとセシルは再び集中する。
すると下から機影が見える。
セシル「機影？　機体照合……デスペア！」
デスペアを発見するとセシルはデスペアへと無線を繋ぐ。
セシル「デスペアパイロットさん　聞こえますか？
こちらＵ―ＴＭ―００１ホープ応答して下さい」
しかしデスペアから返ってきたのは応答ではなくビームサイスだった。
セシル「なっ……!!」
間一髪避ける。
セシル（なに……？どういう事？取り敢えず艦長へ連絡！）
ホープの無線をデスペアからアテナへ向ける。

セシル「艦長！デスペアから攻撃を受けました！
どういう事ですか!?」
シエル「セシル!?　ちょうど良かったわ！　たった今連絡が来たの！　そのデスペアは統制軍のパイロットじゃないわ！」
セシル「えっ!?」
シエル「デスペアは奪取されてる！　恐らく敵はホープの事も狙っているわ！」
この連絡が来たすぐ後ホープの周りには2機のフェンリルが展開していた。
セシル「なんでこんな事!!艦長！応援を下さい！」
シエル「今向かわせているわ！　少しだけ持ちこたえて!!」
セシル「了解！スラスト・ホープ！戦闘開始！
行くよ！『ホルン』!!」
ホープの『スラスト・シルエット』から無数の
角のような浮遊物が展開。
2機のフェンリルに向けて飛んでいく。
セシル「……今！ビーム発射!!」
ホルンの先端からビームが発射される。
しかしフェンリルは間一髪で避ける。

セシル「避けられた!?」
ホープのコックピット内にアラート音が響く。
セシル「後ろ!?」
ホープのスラスターを吹かして上空へ移動。
セシル「当たれぇ！」
ホープの両手に握られているビームライフルからデスペアに向けてビームが発射される。
しかしデスペアは腕のビームシールドで弾きながら接近してくる。
セシル「ホルン!!」
デスペアの両サイドにホルンが展開。
直後ビームが発射される。
しかしデスペアは高度を落とし回避。
ビームサイスでホルンを切り落とす。
セシル「そんな!?」
そして依然デスペアは突撃してくる。
セシル「しまっ……!」
セシル（ダメ……避けられない……!）

しかしデスペアのビームサイスはビームに弾かれる。
セシル「な、なに？」
シオン「セシル！助けに来たよ！」

『第２話』　姉弟

「セシル！助けに来たよ！」
　無線から頼りになる女性の声が響く。　ビームが飛んできた方向には黄色と緑に彩られ、太陽光に照らされたロビン・カスタムがいた。
「シオンさん!!」
「私だけじゃないよ！」
「えっ？」
　すると後方から赤と白のペルセウス・カスタムが向かってきていた。
「あのＭＳ……クリス!?」
「クリス・リヒト　ペルセウス・カスタム戦闘行動開始」
　そう言ってクリスのペルセウスはスラスターを吹かしフェンリル・ウォリアーへ向かっていった。
「コイツは任せろ」
「ええっ!?」
　そう言い残すとペルセウスとフェンリルは海上をつばぜり合いをしながら進んで

いった。
「じゃあ私はあのフェンリルをやろうかなぁ　ガンダムは任せたよっ！」
「えっ!?　り、了解！」
　そう言ってセシルは無線をシエルへ向ける。
「艦長！」
「は、はいっ!?」
　急に無線が入った上に叫ばれたからか声が裏返っていた。
「シュベルト・シルエットをください！　出来るだけ早く！」
「あ、えっとレイ……できるかしら？」
「了解」
　すると機械の音でうるさいＭＳ格納庫にレイの声が響き渡る。
「ＭＳ格納庫　シャッター閉鎖　シュベルト・シルエットをカタパルトへ　シュベルト・シルエット射出シークエンスを開始　シュベルト・シルエット射出！　」
　ＭＳ格納庫から勢いよくシュベルト・シルエットが飛び出す。
「セシル！　今シュベルト・シルエットを射出したわ！」
「了解！　スラスト・シルエットドッキング解除！　」
　ホープの背中についていたスラスト・シルエットを外すと自動で戻って行く。

スラスト・シルエットと行き違いでシュベルト・シルエットが海上を進んでくる。
「シュベルト・シルエットを確認！　ドッキングビームセンサー　発射！」
すると純白に輝くホープの背中から緑色のドッキングビームセンサーが放射される。
「ドッキングビームセンサー　シュベルト・シルエットと同調確認！　ドッキング作業に移行……」
後方から飛んできた漆黒のシュベルト・シルエットが純白に輝くホープの背中にだんだんと近づき、ドッキングする。
「シュベルト・シルエット　ドッキング完了！」
両手に巨大な対艦刀『ガラドヴォルグ』を振り回し、構える。
「シュベルト・ホープ！　セシル・ヴァイス！　戦闘開始です！」
スラスターを最大で吹かし、デスペアに対峙する。
太陽光に照らされ、紫色に妖しく輝くガンダムデスペアもビームサイスを構える。
「あなたは何故っ!!　何故こんなっ!!!」
そう言ってホープのガラドヴォルグがデスペアの頭上に振り下ろされる。
「……」
デスペアパイロットから返事は帰ってこない。
帰って来たのはやはりビームサイスだった。

「クッ……！」
腕のビームシールドでビームサイスを防ぎ、バルカンで牽制する。
「こんな戦争をしてあなた達はなにをしようとしているの!?」
片方のガラドヴォルグを背中に戻し、肩部についているビームブーメランを投擲する。
デスペアはビームサイスでそれを弾き迫ってくる。
「答えてよっ!!」
戻したガラドヴォルグを再び装備し、スラスターを吹かしてデスペアとつばぜり合い状態になる。
「……の？」
デスペアのパイロットの、怒りの込められたような声がホープコックピットに響く。
「貴女こそなんでそんな物に乗っているの？」
そのデスペアの声はセシルのよく知る人物の面影を残していた。
「嘘……その声……ギルバートなの……？」
セシルの脳はその予想を認めようとしなかった。
いや、認めたくなかったのだ。
しかしその予想は外れてくれなかった。

「久しぶりだね……姉さん　もっとお話したかったけどもう時間みたいだ」
「えっ？」
セシルはその意味を理解するのに少し時間がかかってしまった。
その隙を見計らったようにデスペアは戦闘海域を離脱していった。

『第3話』過去

あの戦闘の後アテナのクルー全員が艦長であるシエルにブリーフィングルームへと呼び出されていた。
入る前から室内の重々しい空気がひしひしと伝わってくる。
「ハァ」
小柄で黒髪の少女――セシル・ヴァイスは深いため息をつきながらその扉を開いた。
「失礼します」
部屋の外とは比べ物にならないほど重い空気は
セシルのテンションを下げるには充分過ぎた。
その重い空気の原因はその部屋にいるクルー全員が一言も喋らず暗い表情をして俯いていたからだ。
驚くほど静かな室内にはクルーの息遣いのみが静かに響く。
「……来たわね」
黒髪で大人の雰囲気を漂わせる女性――シエル・アトライアが悲痛な面持ちでセシルを見据える。

「今回全員を呼んだのは……弟の件……ですよね」
　セシルは悲しげに微笑みながら言った。
「え、えぇ……お願いできるかしら……？」
「わかりました……」
「あれは今から６年くらい前私は故郷の小さな村に住んでいました」
「その日は私の誕生日で近くの街まで出掛けていました」
　セシルがその小さい口を開く度にその場にいる全員が息を呑む。
「そこで事故は起こりました」
　その言葉が発された時少女の頬に涙がつたった。
「私が……誕生日にもらうプレゼントを選んでいると後ろから……大きな爆発音が……聞こえて……ッ……」
　セシルはところどころ嗚咽を吐きながら語った。
「自爆テロ……だったらしいです……」
「その後お母さんとお父さんの……死体は見つかったんですが弟の死体だけが何度探しても見つからなかったんです……その後私は孤児院に引き取られて過ごしました……」
「あの戦闘の時驚きと共に安心しました　弟が生きている事が分かって……とても嬉しかったんです……」

「でもまさか……革命軍にいるなんて……」
狭い室内に少女の鳴き声が響いた。
「うっ……うぅぅ……」
「……セシル」
そう言ってシエルは優しくセシルを抱きしめて囁く。
「辛かったわよね……ごめんなさいねこんな話させてしまって……」
「いえ……大丈夫……です」
「セシル……」
シエルは決意のこもった瞳でセシルを見据える。
「は、はい？」
「大丈夫……貴女の弟さんは必ず正気に戻るわ……だから貴女も強くなるの……どんな事からでも弟さんを守れるように……」
「……！　はいっ……」
（待っててねギル……私がきっと貴方を守るから……）
ｓｉｄｅ革命軍
戦闘海域を離脱したあとリーダー――――ダリス・ダッチから無線が来た。
「ギルバート……すまなかったな　まさかもう１機のガンダムのパイロットがお前の姉

だったとは……」
「……いえ、構いません」
「あんまり強がるなよ……溜め込むと体に毒だ」
「お気遣い感謝します」
「おいリーダー！なんで撤退命令なんて出したんだよぉ！もう少しであのペルセウスやれたのに！」
　と、苛立ちを隠せていない……いや、隠さずに話ているのは赤い髪に黒の瞳を持ち、フェンリル・ウォリアーのパイロット　ノイン・エルダーだ。
「すまんな、ノイン　今回はギルの事を考えての撤退だ」
「はぁ!?おいギルっ！どーゆーことだよ！」
「ガンダムのパイロットがギルのお姉さんだったんだってさ～」
　急に無線に割り込んできたのは黒の髪にピンクの瞳を持つ、フェンリル・ガンナーのパイロット　アンネ・ワルサーだった。
「なぁんだそんな事かよ」
「ほら！無駄口たたいてないで早く帰ってこい」
　少し相手をするのがめんどくさくなったのか、ダリスは急かすように言った。
「「了解」」

『第４話』作戦前夜

ガンダムデスペアが奪取されてから３日間　アテナのクルーとＭＳは３６０。全てを海に囲まれた円形の宇宙統制軍特別作戦基地の修復作業を行っていた。

基地内では現在稼働させる事ができるＭＳ全てが人の力では運べない物を運ぶため、忙しそうに動き回っていた。

そのＭＳの多くは量産タイプのペルセウスやロビンだが、それとは全く違う純白に輝くＭＳ『ガンダム』や、アテナに収容されている専用機のロビン、ペルセウスも目に付く。

「全く…派手にぶっ壊してくれたもんだよ」

ＭＳのコックピット内で呆れたように呟くその女性の名はロビンのパイロット―シオン・ベガだ。

「ホントですよねぇ…ガンダム１機奪取するのに基地全部壊さなくてもいいのにぃ」

またもＭＳのコックピット内で拗ねたように呟く赤目に黒髪の少女の名は―セシル・ヴァイス。ガンダムホープのパイロットである。

現在アテナに収容されているＭＳは３機。　そのＭＳのパイロットである彼女達＋

アテナ内唯一の男性パイロットである―クリス・リヒトは毎日朝早くから夜遅くまでＭＳを操縦している。
　しかし彼女達はそれこそ文句を言ってばかりだが、しっかり働いている。
　そのような文句を言っているとアテナより通信が入る。
「セシル　シオンさん　クリスさん　そろそろお昼ですのでアテナへ帰ってきて下さい」
　微笑みながら伝える緑の瞳で綺麗なピンクの髪の少女は―レイ・ルディス。アテナの戦況オペレーターである。
「やったぁ！　戻る！今すぐ戻るよレイ！いぇーい！」
　この報告を受けるとセシルは必ずこうなる。
　しかしこの光景を見るとまだ彼女は１６歳の少女である事を理解できる。
「ははは　セシル～　少しは落ち着きなよ～？」
「……コクコク」
「うっ…はぁい」
　シオンとクリスにそれぞれ釘を刺されセシルは少ししょぼんとする。
「ま、早く戻ろっか」
「うん！　お昼～！」

「…コク」

その頃アテナの艦長である黒の瞳に茶色の髪を持つ大人の雰囲気を醸し出す女性―シエル・アトライアは宇宙統制軍特別作戦基地内部の奥―司令室に呼び出されていた。

「(……私なにかやらかしちゃったかしら…そんな覚え無いけど)」

彼女の表情はあまりよろしく無かった。

注意して見なければ気付かない程度だが、僅かに青ざめている。

最奥に着くとそこには大きな扉がその存在感を示していた。

「……ゴクリ」

彼女はその存在感に息を呑むと少し間をおいてその扉をノックする。

コンコン

「シエル・アトライア艦長であります」

「入りたまえ」

その低く、威圧感のある声が聞こえるとシエルは少し躊躇いながら扉を開ける。

「失礼します」

その声を発すると同時に敬礼をする。

すると低く、威圧感のある声の主―レビル・エイベルも敬礼を返す。

「よく来てくれたね　シエル艦長」
　そしてその低い声に似合わない優しい微笑みで迎えてくれた。
「まぁ掛けてくれたまえ」
　そい言ってシエルの目の前にある見るからに高そうなソファを勧める。
「失礼します」
「どうぞ」
　レビルの秘書―ミリア・ダスティンが出してくれたのは紅茶。
　しかもやはり高そうなカップに入っている。
「ありがとう」
　礼儀の為とりあえず紅茶を口に含む。
　暫く沈黙が出来るがレビルが直ぐに本題へと移る。
「シエル君　君達特別作戦組織―アイアス―には明日より奪取されたガンダムデスペアの鹵獲及び破壊をしてもらう」
「明日…ですか　また随分と急ですね」
「ハッハッハ　すまないな　しかしここ最近―ガンダムデスペアを奪取した宇宙革命軍の動きが活発化していてな　それは余り…いやかなり宜しくない　だから君達アイアスにお願いしたいと思っているのだ」

「なるほど……了解しました　しかし私達はまず何処へ迎えばよろしいのでしょうか？」
「うむ　その件だが、明日この基地…コロニーを出たあと地球近くのデブリ宙域に向かってもらいたい」
「デブリ宙域にですか…？」
「うむ　そこに戦争終了時の宇宙と地球の平和条約の石碑があるのは知っているね？」
「はい」
「その石碑を破壊するとの情報を得た」
「ッ!?　本当…ですか？」
「残念ながら本当だ　その石碑は平和の証だ　破壊させる訳にはいかん」
「そうですね……わかりました　絶対に破壊を止めて見せます」
「本当か！　それではよろしく頼むぞ！」
「はっ！」

その日の夕食。
「なーセシル！　今日のテニス見たか？」
セシルに男らしい、凛々しい声がかかる。

その男性の名前はレーベ・ユーリル。
アテナの砲撃手であり操舵手である。
「うぅ～　ＭＳで作業してたから見れなかったんだよぉ…」
今まで通り遅くまで作業だったためセシルはスポーツの中で１番好きなテニスを見ることができなかったのである。
「そうかぁ　それは残念だったなぁ　今回お前が応援してる選手が宇宙ランキング５位のやつに勝ったんだぞ～！」
何故か自分がやったかのように伝えるレーベにセシルがさらにしょんぼりとする。
「ちょっとレーベ　あんまりセシルを虐めるんじゃないの！」
そこにシオンが助け舟を出す。
「ちぇ　ま、録画しておいやったから後で見ようぜ！」
「えぇ！本当!?　見る見る！　やったぁ！」
セシルが太陽のように明るい笑顔で笑う。
今日も１日が平和に終わろうとしていた。
しかし。
「みんな　ちょっといいかしら」
シエルが急に席を立ち、クルーに話を聞くように促す。

「？　どうしたんですか？艦長」
　当然の如く不思議に思ったレイがシエルに質問する。
「今日　レビル司令からガンダムデスペアの鹵獲及び破壊を命じられたわ」
　この報告を聞いた瞬間室内の温度が下がったように感じた。
「出発は明日よ」
　いつかは来ることだとはわかっていたが、デスペアのパイロットがセシルの弟だと気付いて僅か3日である為全員の心配そうな視線がセシルに向く。
「……わかりました」
　しかし当のセシルはあっさり了解していた。
「……セシル？　相手は…その…弟さんよ？」
　1番心配そうにしていたシオンがセシルに確認を取る。
「うん　わかってるよ」
「だったら！」
「大丈夫だよ　だって目的はガンダムデスペアの『鹵獲』及び破壊でしょ？　鹵獲すればギルは死なないもん　大丈夫だよ」
　静かな部屋にセシルの声のみが響いた。
「……そうね　鹵獲しちゃえばいいんだもんね」

セシルがまだギルを諦めてない事を知るとシオンは安心したように微笑んだ。
「皆も……いいかしら？」
シエルが確認を取る。
すると全員が覚悟を決めた目で頷く。
「そう…なら今日は全員早く寝なさい　明日から忙しくなるわよ！」
「「はい！」」

『第５話』　作戦開始

ガンダムデスペアの鹵獲及び破壊命令が下った次の朝。
カーテンの隙間から射し込む朝日と小鳥の囀りで黒髪で赤の瞳を持つ少女――――セシル・ヴァイスは目を覚ます。
「ん……うぅん……朝……かぁ　ふあぁぁ……」
大きな欠伸をしながら軽く伸びをする。
そしてベッドから這い出てカーテンを開ける。
「んーー！　今日もいい天気！」
それからベッドに備え付けてある時計を確認する。
時計の示している時間は７時５６分。
作戦の為コロニーから出る４分前である。
「ヤバっ！　今日コロニーから出る前に基地の皆に全員で挨拶するんだった！」
セシルの今の格好は上下パジャマで髪の毛がはねている寝起きそのものである。
「うううぅ　せめて髪の毛はちゃんとしててくれても良かったのにぃ……」
などとボヤきつつドタバタと準備を始めた。

現在時刻は７時５９分。　集合ギリギリの所でセシルが走ってくる。
「危ないなぁセシル　間に合ってよかったな　何時に起きたんだよ」
と苦笑いを浮かべながら話しかけてくる女性にしては高身長な彼女はシオン・ベガ。ロビン・カスタムのパイロットである。
「起きたのは７時５６分だよぉ　ほんと間に合ってよかったぁ」
エへへと笑いながらセシルは自分の起きた時間を伝える。
「おぉ…思ってたより随分ギリギリだな…」
彼女の顔から苦笑いは引かなかった。
そんな会話をしている所にアテナ艦長　シエル・アトライアの声が響く。
「我ら宇宙統制軍特別作戦組織アイアスはこれよりガンダムデスペアの鹵獲・破壊作戦を開始します！」
シエルが作戦の開始を伝えるとアテナのクルー全員が敬礼をする。
そして基地に残る宇宙統制軍の総司令官―レビル・エイベルが１歩前に出て敬礼を返す。
「アテナクルー全員の無事と作戦の成功を祈る！　全員敬礼！」
バッ！と言う音がするほど全員がタイミングバッチリの完璧な敬礼を返してくる。

その敬礼を背中に受けながらクルーはアテナへと向かっていった。

ブリッジの中。艦長のシエルは遂にアテナの発進作業を開始させる。
「さぁ！遂に出撃よ！　皆よろしく頼むわ！」
「艦長！　アテナの発進準備完了しました！」
ブリッジ内にアテナの操舵手兼砲撃手であるレーベ・ユーリルの声が響く。
「わかったわ　離水上昇！皆行くわよ！　アテナ発進！」
「了解！」
シエルの強い声に応えるようにレーベがアテナの操縦桿を引き、アテナの高度が上昇していく。
そしてコロニーの出口からアテナが宇宙へ進出した。

ｓｉｄｅ革命軍
革命軍の保持している戦艦「バハムート」のブリッジ。
パイロットスーツの男――ノイン・エルダーとバハムートの艦長である中年の男――ダリス・ダッチが話をしていた。
「なぁダリスー　ほんとにここをあの連中……アテナのヤツらが通るのかぁ？」

　時刻は８時５分。
「あぁ間違いない　今頃アテナのヤツらはコロニーから宇宙へ出ようとしてる頃だろ」
「ほんとかよ？　だいたい何でそんな自信に溢れてんだよ」
　ダリスは部下には「石碑を破壊する」事の情報を伝えていなかった。
「あぁ　俺らと『協力関係』にあるアイツらに協力してもらって『地球と宇宙の平和記念の石碑を破壊する』っていう情報を流してもらったからな　だからアテナのヤツらはこのデブリ宙域に来るさ」
「…あんな胡散臭いヤツらに協力を仰いだのか……？　大丈夫なのかよ……」
「問題無いだろう　アイツらとは協力関係だからな」
「はぁ…そうかい　ま、俺はあのペルセウスをやれればあとはどーでもいい！」
「ダリス艦長！」
　そんな会話をしていた時オペレーターが叫ぶ。
「なんだっ」
「現デブリ宙域に接近してくる大型の熱源を発見！　これは…宇宙統制軍のアテナです！」
「ふっ…ようやくのお出ましか…　ガンダム・フェンリル・ウォリアー・ガンナーを出撃させろ！　ここでアテナを沈めるぞ！」

アテナブリッジ内は静寂に包まれていた。
アテナで初の宇宙進出という事もあるためであろう。
「艦長　そろそろデブリ宙域へ到着します」
「そう…　皆わかってると思うけどここはデブリ宙域　敵がいつ出てくるかわからないわ　気を引き締めていてね」
言った瞬間アテナのブリッジ内にアラート音が鳴り響く。
「なに!?」
「ビームが来ます!　エンジンへの着弾が予想されます!」
ピンクの髪に緑の瞳を持つオペレーターの少女――――レイ・ルディスが的確に情報を与える。
「レーベ!　回避!」
顔に冷汗を浮かべながらセシルは回避を命令する。
「了解!」
レーベが力いっぱい操縦桿を傾ける。
アテナのエンジンをビームが掠める。
「直撃は避けました　エンジンの損傷はありません!」

「レーベ　良くやってくれたわ！　ホープ・ペルセウス・ロビンの発進を急がせて！」
するとメインモニターにパイロット3人の姿が映る。
格好は既にパイロットスーツに着替えている。
「艦長　私達の準備は出来てますよ！」
シオンが右手の親指を突き立てて応える。
「そう　じゃあ発進お願いできるかしら？」
「もちろん！　任せてくださいよ！」
そう言って3人はＭＳ格納庫へと走っていく。

セシルは慣れた手付きでホープを起動させる。
「よっし　レイ！」
コックピット右上のミニモニターにレイの姿が映し出される。
「うん　ホープ発進シークエンス開始　シルエットはカノーネを選択」
出撃デッキのサイドからカノーネ・シルエットが出てくる。
綺麗な緑色をしたカノーネ・シルエットが純白のホープの背中にドッキングする。
「ＭＳ格納庫シャッター閉鎖　カタパルトにホープを固定　射出準備完了　射出タイミングをホープに譲渡」

「了解！　カノーネ・ホープ　セシル・ヴァイス　行きます！」
カタパルトからカノーネ・ホープが射出される。
続いてペルセウス・ロビンが射出される。
ホープのコックピット右上のミニモニターにシオンが映し出される。
「私はフェンリルのガンナーをやる　あとの２機は頼んだよっ！」
「えっ!?ちょっ！シオンさん!?」
セシルの叫びがシオンに届く前にシオンは通信を切ってしまっていた。
「はぁ…しょうがないね　ねぇクリス　フェンリルのウォリアーは任せてもいい？」
セシルが問いかけるとクリスは力強く頷く。
「ありがと！　じゃお願いね！」
そうしてホープとペルセウスはそれぞれ別の方向に進んでいった。

『第６話』父と母と

漆黒の宇宙でただ静かにデブリが浮いている。　特に何の異常も見られない。
別にフェンリル・ウォリアーや、フェンリル・ガンナー、ガンダムデスペアが発見された訳じゃない。
しかし漆黒の宇宙の中に輝く純白のＭＳ　ガンダムホープのコックピットに座る少女――セシル・ヴァイスは自分の直感のような『なにか』で自分の弟が操縦しているガンダムデスペアは現れると感じていた。
そしてその予感は的中した。　コックピット内にけたたましくアラート音が鳴り響く。
「くっ！　ギル!!」
ホープは緑色のビームライフルを回避し、左手のビームマシンガンを放つ。
マシンガンの弾は　宇宙〈そら〉に呑み込まれるように消えていく。
いきなりホープのコックピット内にセシルの弟――ギルバートの声が響く。
「姉さん…なんで姉さんはそんなＭＳに乗っているの？」
その声はあらゆる感情を押し殺したような声だった。

質問に答えるより前にデスペアのビームライフルからビームが飛んでくる。
「そんなの平和を乱す革命軍を倒す為ち決まってるじゃない！」
セシルはそのビームを回避しながら答え、同じようにホープのビームライフルでビームを放つ。
「『平和を乱す』…か」
「そうでしょう⁉　革命軍なんて出て来なければお父さんもお母さんも死ななくてよかったのに!!」
「それは違うよ姉さん…」
「えっ…？」
セシルに少し動揺が出た所をギルは見逃さない。
ホープに接近し、デスペアのビームサイスで切り裂く。
しかし、ギリギリの所でシールドを展開。その攻撃を回避する。
「何が違うのよ！　革命軍のせいでお父さんとお母さんは！」
「確かに父さんと母さんが死んだのは革命軍が原因だよ　でもそれには理由があったんだよ」
「理由？」
「そうだよ　父さんと母さんはジャーナリストをやってたよね」

「それが…なんだって言うのよ！」
「僕達が住んでいるところとは全く違うコロニー　そこにあるスラムのような所は統制軍の兵士によって辛い生活を強いられているんだよ」
「なっ…!?」
「そして父さんと母さんはその事を知っていたにもかかわらず雑誌やなにかに掲載しなかった　そんな事が起きているのにほんとに今は『平和』って言えるの？」
「そ、それは…」
「どうなんだよ！　統制軍　ガンダムホープのパイロット！セシル・ヴァイス！」
珍しくギルバートが感情を顕にしてガンダムホープに接近、ビームサイスを振り抜く。
「くっ…！」
セシルはギルバートの気迫に怯み、少し反応が遅れてしまう。
そしてビームライフルをビームサイスに切り裂かれる。
「それでも！　テロなんて起こす必要はあったの!?　お父さんとお母さんがダメでも他のジャーナリストの人に頼んだりじゃダメだったの!?」
セシルはそう叫びながらビームナイフを投擲した。
デスペアはビームサイスでナイフを弾く。

しかし、ビームサイスを振った瞬間にカノーネ・ホープの腰部に付いているガーンディーヴァでデスペアの足を撃ち抜いた。
「なっ!?　クソッ!」
そう言ってデスペアはブーストを蒸し、戦線を離脱していった。
「あっ!　ギル!……クリス達を助けに行かなきゃ…」
そう言ってホープでクリス達を探しに、移動を始めた。
ｓｉｄｅクリス
クリスは相手のフェンリル・ウォリアーに少し手間取っていた。
お互いに剣の数は同じだがペルセウスのが遠距離武器を多く持っているはず。
しかしフェンリル・ウォリアーのパイロットの腕が凄くいいのだ。
クリスはペルセウスの肩部についているビームブーメランを投擲する。
しかし、フェンリル・ウォリアーは両手のでブーメランを弾きながら突っ込んでくる。
「くっ…!」
クリスはそれを同じように両手のペルセウス・ハルパーでつばぜり合いをしようとする。
しかしフェンリル・ウォリアーが急回転し、ペルセウスの背後に回る。
「なにっ!?」

そして背後からハンドグレネードを投擲。　ペルセウスのバックパックが爆発する。
「くっ！」
そこにフェンリル・ウォリアーは更に追撃をかける。
いや、かけようとした。
しかし遠距離から飛んできたビームライフルとは比べ物にならない大きさのビームが飛んでくる。
「クソッ！誰だよ！俺とそこのペルセウスとの潰し合いを邪魔すんのはよぉ！」
悪態をつきながらビームが飛んできた方向を見る。
するとそこには純白に輝くガンダムがいた。
「あぁ!?　ガンダム!?　　おいおいギルバート！何やってんだよ！」
ペルセウスのコックピット内にセシルの声が響く。
「クリス！　大丈夫!?」
「セシル!?　お前　ガンダムは?」
「逃げられちゃった…」
「そうか…　援護頼むぞ」
そう言い残してクリスはフェンリルに突っ込んでいく。
「ええ!?　ちょっ！　クリス!?…もう！」

そこからは圧倒的だった。
まずクリスが突っ込む。
それを両手剣で受けた所を横からガーンディーヴァを放つ。
しかしフェンリルは避ける。
そしてフェンリルの注意がホープに向いた瞬間クリスはフェンリルの左手を切り落とす。
そしてフェンリルの注意がもう一度クリスに向かうとホープのガーンディーヴァがフェンリルの両足を撃ち抜く。
「ぐぁぁぁぁぁ！　くっそ！コイツら！　　チッ！一旦退く！　じゃあなペルセウス！　次はサシでやろうぜ！」
フェンリルのパイロットは相手には聞こえていないが、それを言い残して去っていった。
「……行ったね…クリス　私はシオンさんを助けに…行くつもりだったけど帰ってきたね！」
「…そうだな」
「いやー派手にやられちゃったよ」
見るとロビンはビームスナイパーライフルは持ってなく、左腕がなくなっていた。

「大丈夫なんですか？　シオンさん！」
「うん　あたしは大丈夫だよ　だけどロビンが…ね」
「…工廠でセリスに直してもらえば大丈夫だ」
クリスの口からさりげなくでた『セリス』と言う名前。
本名はセリス・フィロ。
アテナの整備士だ。　１人で全てのＭＳをな直すことができる技術はすごいとしか言いようがない。
「そうだねぇ　フィロ君に頼むかぁ　ま、取り敢えず石碑の破壊は止められたって事でいいんだよね？」
「うんっ！　作戦せいこー！」
「…成功だ」
「いよっし！　さ、皆　アテナに戻るよ！」

そして３機のＭＳはアテナへと戻っていった。

アテナに戻ったあとセシル・クリス・シオンは、フィロに小一時間程怒られたのは言うまでもない。

『第７話』　大気圏

デブリ宙域から帰投したホープ・ペルセウス・ロビンはアテナへと収容され修理、補給をうける為宇宙統制軍と協力関係にある地球へと向かっていた。
アテナのブリッジ内にはキーボードを操作する音だけが響いている。
「レーベ　大気圏突入ポイントまであとどのくらいかしら？」
アテナの砲撃手兼、操舵手　レーベ・ユーリルに声をかけたのはアテナ艦長　シエル・アトライアだ。
「そうですねぇ…」
少し考える素振りを見せ、レーベは答える。
「あと半日って所ですかね」
「そう……ハァ……きゃぁっ！」
シエルは答えを聞いて軽く項垂れ、溜息をつく。
すると急に後ろから抱きつかれた。
「艦長～　溜息なんてつくと幸せが逃げますよ～」
後ろから抱きついた人の正体はガンダムホープのパイロットセシル・ヴァイスだっ

た。
「もうセシル～！　いきなり後ろから抱きつくのはやめてよ～！」
「え？　じゃあ前からならいいんですか？」
セシルはかわいらしく首を傾げて疑問を投げかける。
「そういう事じゃなくてー！　もう…」
これ以上言っても無駄と感じたのかそれ以上言わなかった。
「それで何で溜息なんてついてたんですか？」
「んー？それはね…」
ドカーーン!!
シエルがセシルの質問に答えようとした瞬間、艦が衝撃に揺れる。
「な、なに!?」
革命軍の作戦を阻止し、襲撃はありえないと完全に油断していた為、アテナの戦況オペレーターであるレイ・ルディスは休養を取っていた。
衝撃から数十秒後レイが戻ってきた。
「すいません！遅くなりました！」
「構わない…っていうわけにはいかないけどしょうがないわ　状況は？」
確かに仕方ないのだ。　レイに休養を取るように指示したのは他の誰でもないシエ

ル本人なのだ。
「はい　後方にＭＳ群　数は…3　その内の1機は…ッ！　ガンダムです！」
「なんですって!?　そんな！　速すぎるわ!!」
革命軍の作戦を阻止してからまだ2時間もたっていなかった。
ブリッジ内に動揺が走る中、1人の少女が口を開く。
「艦長　ホープの出撃許可を」
「えっ!?」
「ホープはカノーネのビームライフルしか壊れてません」
「……それしかない…わね　わかったわ！　レイ　セシル　ホープの出撃準備を開始してくれる?」
「了解！」
この時シエルは少し戸惑っていた。
理由としては簡単だ。
セシルが発しているオーラというのだろうか。
それがいつもと違う。　そんな感じだった。
「(セシル……)」
シエルがそんな心配をしている事には気付かずにセシルはブリッジから出ていった。

セシルがＭＳ格納庫へと向かっている途中でクリスとシオンが部屋から出てきた。
「セシル！　状況は!?　なにがあったの!?」
「革命軍のＭＳが出てきたの　私がホープで出るわ」
「セシル１人で!?　危険だわ！　私達も…！」
「ダメよ…ロビンやペルセウスは破損しているわ　とても無理よ」
この時シオンは焦りで気付いていなかったが、クリスは気付いていた。
セシルがいつもと違うという事を。
「でも…！」
「大丈夫　２人は待ってて　私が直ぐに終わらせてくるから」
そう言ってセシルはＭＳ格納庫へと向かっていった。

「セリスさん！　ホープは?」
「あ、あぁ　スラストでなら出れるよ」
「わかりました　ありがとうございます！」
それだけ言ってホープのコックピットへと姿を消していった。

「レイ　お願い」
「わかった　ホープ　出撃シークエンスを開始　シルエットはスラストを選択　ＭＳ格納庫　シャッター閉鎖　カタパルトにホープを固定　射出準備完了　射出タイミングをホープに譲渡」
「了解！　スラスト・ホープ　セシル・ヴァイス　行きます！」
漆黒の宇宙に純白に輝くガンダムが放たれた。
しかしいくらガンダムの性能と、セシルの操縦技術があろうとも現状は３対１。
シエルはペルセウスの修理を急がせていた。
しかし……

ＭＳ戦は基本、数が物を言う。
今回の戦闘は３対１。　革命軍のＭＳパイロット達は勝利を確信していた。
しかし、この予想は外れる事となる。
セシルはホープの腰部に収納されているビームサーベルを引き抜き３機の敵ＭＳに突っ込んでいく。
「ハハハ！　ガンダム１機とはなぁ！　勝てるわけねぇだろぉがよぉ!!!　さっきの借りを返してやるよぉぉ！」

ノイン・エルダーはそう叫んでフェンリル・ウォリアーの両手の剣をクロスさせ、ホープのビームサーベルを止めようとする。

しかし、ホープはビームサーベル1本でフェンリル・ウォリアーの両手首が切り落とす。

一瞬の出来事でノインは状況が理解出来なかった。

「……え?」

ノインが惚けている間にもホープは敵ＭＳ――――フェンリル・ガンナーへと向かっていく。

「アタシに向かって直線で突き進んでくるなんて　アンタアホかい?」

アンネ・ワルサーはそう言ってフェンリル・ガンナーのビームスナイパーライフルを構え、ビームを放つ。

照準はぴったり、外れる気がしていなかった。

「…ッ!」

しかしセシルはホープを左に回転させ、ビームを避ける。

「なっ!?　アタシが外した!?」

アンネが驚いている間にもホープはフェンリル・ガンナーに向かって突き進んでくる。

「く、くそっ！」
それは悪足掻きだった。
ホープに向かってビームハンドガンを構える。
しかし、構える事しか出来なかった。いや、させてくれなかった。
引き金を引く前にビームハンドガンの銃口は切り落とされ、フェンリル・ガンナーのメインカメラを切り落とされる。
その間約１分。
「…姉さん…？」
ギルバートは驚きを隠せなかった。
ノインもアンネもそのへんのパイロットなら瞬殺出来るような腕の持ち主だ。　それがさっきまで自分と互角Ｌｖ．だった姉に瞬殺されてしまった。
そして暗い宇宙に輝く純白のガンダムがゆっくりとこちらを向く。
「くっ……！　姉さん！」
返事は返ってこない。　無線からも伝わってくるホープのコックピット内の緊張感。
こんな感じはホープのコックピット内で今までで一度たりとも感じた事など無かった。
「（なんだ？この感じは…パイロットは姉さんじゃないのか…？）」

ギルバートはホープのパイロットがセシルではないという考えに至った。　しかしそれはありえないとわかっている。
そんな時ホープのコックピット内にレイの声が響く。
「セシル！　もう少しで大気圏だよ！　早く撤退して！」
しかしそのレイの言葉にも反応を示さない。
レイはホープのコックピット内部をミニモニターに映す。
するとセシルの綺麗な赤色の瞳が蒼くなっていた。
「……セシル…？」
ホープはデスペアに向かってブーストを蒸す。
「ビームサーベルなんかでっ!!」
それを迎え撃つようにデスペアはビームサイスを横に一閃する。
しかしホープはそれを読んでいたかのように後ろ宙返りをし、ビームライフルでデスペアの左腕を撃ち抜く。
デスペアのコックピット内に衝撃が走る。
「くぅう…」
そしてまたホープはデスペアに特攻。
ビームサーベルでデスペアの右腕を切り落とす。

「なっ…　はやい…」
　すると今まで一度も反応を示さなかった姉の声がデスペアのコックピット内に響く。
「２機のフェンリルを連れて撤退しなさい」
　それだけ伝えるとホープはまるで最初からパイロットなんていなかったかのように大気圏へ真っ逆さまに落ちていった。

『第7．5話』セシル

セシルside

深い深い闇の中で私は目を覚ました。

「あれ……？　ここは？」

確か私はアテナのブリッジで艦長達とお話していたはず。

でもここは何にもない。見渡す限り闇だ。

「真っ暗だなぁ……　あの！誰かいませんか！」

こんなところに誰もいる訳……

「いるよ」

「……へ？」

あった。

「何を気の抜けた声を出してるの？　貴女が私を呼んだんでしょ？」

「いや、でも…まさか本当にいるなんて思わなくて…」

「うーん　『いる』って言うのは間違っているのかな？」

「へ？」

「貴女…それ２度目よ？　『私』がいるっていうか『私』は『貴女』だもの」
「へ？　……えぇぇぇぇぇぇ!?」
「うるさっ！私は『貴女の２人目の人格』ということになるわ」
　あ、よく考えてみたら声がそっくりだ…。
「あの…ここはどこ？」
「ここは意識の中　『貴女』と『私』の意識の中よ」
「意識の…中？」
「そう　私が表に出ている時は貴女が　貴女が表に出ている時は私がここにいるわ」
「とゆーことは貴女は今表に出ているの？」
　なんだか頭が痛くなってきたよ……。
「そう　今は貴女の身体を借りて戦っているわ」
「えぇっ!?　貴女、戦った事あるの!?」
「あるもなにも私は貴女よ？　戦闘経験なんて豊富じゃない」
「あ、そか…そーだったよ」
「貴女も今の景色…見てみる？」
「見れるの？」
「えぇ　身体はまだ返せない…とゆーか返さないけど」

「ええ…まぁいいや　見せて」
　ちぇっ　身体奪い返そうと思ったのにい…。
「わかったわ　視覚リンク　開始」
『私』がそう言うと目の前に眩しいくらいの光が溢れる。
　そして光が消えると、そこには3機のＭＳ――――デスペア、フェンリル・ウォリアー、フェンリル・ガンナーが目の前に佇んでいた。
『え、なにこの状況』
「見えている通りよ？」
『こんなの無謀でしょ!?』
「大丈夫よ　ま、貴女はただ見ているだけでいいわ」
『なにかしたくても見ていることしかできないよ…』
「あら　そーだったわね」
　もう1人の私は軽く笑うと3機に突っ込んでいく。
　そしてガードに来た（と思われる）フェンリル・ウォリアーを一瞬にして無効化する。
　フェンリル・ウォリアーを無効化したと思ったら瞬時にターゲットを切り替え、フェンリル・ガンナーに向かっていく。
『危ないよ！　相手はスナイパーだよ!?』

「大丈夫よ　ロックオンされるより早く動けばいいんだもの　簡単よ」
もう１人の私はそう言うとスラスターを蒸し、スピードを上げる。
相手のライフルから放たれたビームはホープの直ぐ横を通り過ぎていく。
そうしてフェンリル・ガンナーまでも直ぐに無効化した。
セシルｓｉｄｅｏｕｔ
もう１人のセシルｓｉｄｅ
『すごい…』
「でしょう？」
『えぇ…そこは謙遜とかさ…ないの？』
「無いわよ」
『あぁ　そうですか…』
「あと１機ね」
そう言ってホープをデスペアへ向ける。
『…ギルは強いよ？』
「えぇ　わかっているわ」
「姉さん！」
「……」

『答えないの？』
「ええ」
「セシル！　もう少しで大気圏だよ！」
今度は弟ではなく、戦況オペレーターの声が響く。
「そんなの『今の私』ならわかるわよ…」
私は小さく悪態を吐いて、ホープでデスペアに突っ込む。
それに応戦しようとデスペアはビームサイスを一閃する。
それを私は難なく躱し、ビームライフルを放つ。
まずは左腕。
次は右腕。
ビームサーベルを構え、デスペアに突撃。
予定通り右腕を破壊する。
「２機のフェンリルを連れて撤退しなさい」
そうして私は彼女に身体を返した。

「第８話」　地球

　デスペアが撤退したあとホープのコックピットの中でセシル・ヴァイスは意識が引き上げられるような感覚を覚える。
「身体…そろそろ返すわ　私ちょっと疲れちゃった」
『え、えぇぇぇ!?　このタイミングで!?　私大気圏突入なんてやったことないよ!?』
「それはそれは　でも大丈夫よ　大気圏突入に必要な作業はしておいたから　貴女はただコックピットにいてホープが摩擦熱で爆散しないことを祈っているだけでいいわ」
『なんで貴女は不安を煽るようなこと言うの!?』
「あら　ごめんなさい　それじゃまた後でね」
　もう一人のセシルがそう言った瞬間セシルの意識が身体に戻る。
「ほ、ほんとに全部やってある…」
『当たり前じゃない　私　そういう嘘は吐かないわ』
「うわっ！　び、びっくりしたぁ　急に喋らないでよ！」
『また後でね　って言ったじゃない　それに話すのはだいたい急だと思うけれど?』
「そ、そうでしたね…」

『さぁ　あと１０秒後に大気圏突入よ』
　大気圏突入と同時に摩擦による激しい揺れがホープのコックピットを襲う。
「大気圏ってこんなに揺れるの!?」
『えぇ　そうみたいね』
「あぁ　私も初めてだから貴女も初めてだったね」
「当たり前じゃない」
　そんな会話をしているとノイズ混じりにレイの声がホープのコックピット内に響く。
「セシ…! 聞こ…る!?　応…うし…!」
「レイ!?　聞こえるよ!」
「そ…よかっ…　予想……あと1分…球に降りれ…わ」
『あと1分か　結構早いのね』
「そうだね　了解だよ　レイ」
　だんだんとホープを襲う揺れが弱まっていく。
　完全に揺れが収まった時ホープのモニターが捉えたのは
　地上1面に広がる砂漠だった。
「セシル?　聞こえるかしら」
　ホープのコックピット内に響いたのはアテナ艦長シエル・アトライアの声だ。

「はい　聞こえます」
「ここはアフリカ大陸北部　サハラ砂漠のド真ん中よ」
「あ、アフリカ？　サハラ砂漠？」
『そんな事もわからないのね　アフリカ大陸って言うのは地球の大陸の１つ　んーわかりやすく言うと宇宙には宙域というものがあるでしょう？　アレよ』
「あぁそーゆー事ね　オッケー！」
「……セシル？」
「はい？」
「いや、あの…誰とお話しているの？」
「え、えっとぉ…」
『あーあ　やらかしたわね　どーするの？　私にはもう一つの人格があるんです！　なんて言ってみる？』
「そんな事言える訳ないじゃない！」
「セシル？」
「はいっ！　えっと……これは……そう！腹話術です！」
「そ、そう……まぁいいわ　アフリカ大陸のサハラ砂漠にいるんだけど私達の目的はオーストラリア　その首都のキャンベラよ」

「お、オーストリア？　キャンベル？」
『オーストラリアとキャンベラよ　結構ズレてしまったわね……インド洋を超えなきゃならないじゃない』
「い、インド洋？」
『……もういいわ　貴女はただ返事してなさい』
「え？　う、うん　分かった」
「取り敢えずあの砂漠に降りてからホープを収容するわ」
「了解です　艦長」

『第９話』名前

　無事地上に降りたセシルを待っていたのはクルーからの質問攻めだった。
　セシルの周りはクルーに囲まれていて逃げられない。
「なんであの3機相手に勝負が一瞬だったの!?」
「いや、あの…」
　セシルが答えようとすると他の質問が来る。
「なんで私が通信入れたのに無視したの!?」
「えっと……ねぇ！　貴女からもなんか言ってよ！」
　セシルはこうなった原因に小声で助けを求める。
『無理よ　だって今貴女の意識の中にいる訳だし』
　呆れたような声で拒否する。
「身体なら渡すからっ！」
『貴女それ物凄くイケナイ方向に捉えられる言い方よ?』
　言われてハッとする。
　が、今はそれどころじゃない。

「そーゆー意味じゃ無くて！　お願い～！」
「ちょっとセシル！　聞いてるの!?」
「ひ、ひゃいっ！　えっ…えっとぉ」
『もう…しょうがないわねぇ…　じゃあよくマンガとかであるようなそのへんのチンピラがメチャ強い主人公に負けた時の助けを乞う時みたいな事言ってみなさい？』
「ごめんなさい！　これ以上は勘弁してください！」
ブリッジの中にセシルの声が響き渡る。
するとクルー達の頭も冷えたようで
「ちょっとやりすぎちゃったみたいね…ごめんなさい」
全員がこのような感じでセシルの周りから去っていった。
「あ、ありがとう！」
『ふふっ　どういたしまして』
質問の嵐から解放されたセシルは自室へと戻っていった。

夕食を終え、セシルは自室でもう1人の自分に声を掛けた。
「ねぇ…貴女は名前みたいなのは無いの？」
『あるわよ？』

「えっ？　何て言うの？」
『セシル・ヴァイス』
「それって私の名前じゃん…」
『えぇそうね　でも私はもう１人の貴女だから』
「んーそっかー…」
　セシルはなにか考えるように黙る。
「あっ！」
『うるさっ！　な、なによ…』
「名前！」
『は？』
　もう１人のセシルには彼女が何を言っているのか分からなかった。
「名前だよ！　私がつけてあげる！」
『は？……え？』
「んーっとねー　そうだなぁ…」
『ちょっと！　私まだ認めてないんだけど!?』
「え？　いいじゃん」
『なにがよ!?』

「いや、私が二重人格者？って言うのかな？それをいつまでも黙ってる訳にはいかないじゃん？」
「そしてその時両方セシルだとどっちがどっちかわからなくなるじゃん！」
『別にその時表に出てるほうが呼ばれてるセシルでしょ？』
「うっ…いいの！　取り敢えず名前つけるの！」
『貴女私に名前つけたいだけでしょ!?』
その後ももう1人のセシルが抗議するが聞く耳持たずで結局名前を付けられてしまった。
つけられた名前は［セシリア］。
その日からもう1人のセシルはセシリアとして生きていくことになった。
「ふふふっ　よろしくね！セシリア！」
『全く…よろしく』
そう言うセシリアの声は満更でもないような声だった。

「ふむ…アレが例の新造艦か…」
サングラスをした上から双眼鏡を覗きアテナを捉えるその男はもう1人の部下と思われる男に言った。

「よし！　夜明け前にアレに奇襲をかける！　全艦へ連絡を！」
「了解しました」
「待ってろよ？　盾持ち…俺達が盾持ちの女神を沈めてやるよ…！」

『第１０話』砂漠の狩人―デザートハンター―

アテナ艦内は静寂に包まれていた。
時刻は朝…深夜の３時を指している。
艦内に響くのはアテナのエンジンの小さな音。
それとアテナクルー数人がブリッジで奇襲防止の索敵を行うキーボード操作の音と、あくびの音くらいだ。
そんな静寂に、セシルとセシリアも包まれていた。
が、その静寂は急に破られる。
「ッ！　熱源反応を探知！　これは…車両？」
アテナの戦況オペレーターであるレイ・ルディスが艦長のシエル・アトライアに告げる。
「車両…敵襲の可能性があるわ！　コンディションイエローを発令　パイロットの皆を起こしてＭＳで待機」
「了解」
ついさっきまで静寂に包まれていた艦内に警報とレイの声が響く。

「コンディションイエロー発生！　アテナクルー全員の起床を求めます　ＭＳパイロットは各ＭＳコックピット内で待機」
　静寂を破るけたたましいアラート音と聞き慣れた少女の声によってセシリアは眠りから覚める。
　しかし……
「ん、んぅ…すぅすぅ」
『ちょっとセシル！　起きてよ！』
「んぅ…？　セシリア？　まだ月曜日なんだから寝なきゃ…すぅすぅ」
『何言ってんのかわかんないし！　しかも今日水曜日だし！　いいから早く起きて！　コンディションイエローよ！』
「へ…？　ん…　おはよ　セシリア…」
『全く…なんで意識の中にいる私のが早く起きるのよ…』
「あ、あはは…」
『笑ってないで早く支度して！　コックピットへ急ぎましょう』
「うん　了解だよ」
　幸い髪ははねていない。
　こういう緊急の時の為にパイロットスーツは個人の部屋にも置かれている。

セシルは素早くパイロットスーツに着替え、ＭＳ格納庫へと向かっていった。

ＭＳ格納庫に着くと整備士のセリス・フィロが駆け回っていた。
理由としてはＭＳ起動前の最終チェックだ。
「おっとセシル！　ホープのチェックは終わってるよ！」
「ありがとう！　セリスさん！」
ＭＳコックピットに入ると無線からシオン・ベガの声が響く。
「セシル　疲れは取れてる？　無理しないでよ？」
シオンが心配するのも無理はない。セシルは１人で３機のＭＳの相手をし、大気圏を突破してきている。
集中力や、体の疲労はすごいだろう。
その上ろくな睡眠も取っていない。
今日寝れたのはせいぜい４時間といったところだろう。
「うん　ありがとシオンさん　でも大丈夫！」
「そう…無理はしないでね…」
「了解だよ！　シオンさん！」

冷えきった砂漠で彼らは行動を開始する。
砂煙に溶け込むようなカラーの車両で獲物―アテナへと向かっていく。
「全員準備はいいか！」
サングラスの男は無線でメンバーに声を掛ける。
「はい！　α準備完了です！」
「βも準備完了です！」
「γも準備完了です！」
「よし…総員作戦開始！　あの盾持ちは俺らが―砂漠の狩人《デザートハンター》が仕留める！」
「「了解っ！」」
そうしてαチームのロケットランチャーがアテナへと牙を向く。

アテナ内にアラート音が鳴り響く。
「熱源が接近！　恐らくロケットランチャーの弾頭と思われます！」
戦況オペレーターのレイ・ルディスが叫ぶ。
「くっ！　やっぱり敵だったのね…レーベ！回避！」
「マジですか…まぁやれるだけやってみますよ！」

アテナ操舵手のレーベ・ユーリルが力いっぱい操縦桿を操るが、間に合わない。
弾頭がヒットしたと同時にアテナを衝撃が襲う。
「くっ…ＭＳ３機に出撃命令！　頼んだわよ…」
「了解」

「セシル…聞こえた？」
「うん　出撃だよね！」
「ホープの装備はどうする？」
『スラストあたりがいいんじゃないかしら？』
「どうして？」
『だってカノーネの火力じゃ他の施設を壊してしまいそうだし、シュヴェルトだと近づかないと攻撃出来ないじゃない』
「んーそっか…わかった　レイ！　スラストをお願い！」
「わかった」
スラストを装備したホープがカタパルトへ誘導される。
レイの指示が入り射出のタイミングがセシルに渡される。
「セシル・ヴァイス！　スラスト・ホープ　行きます！」

出撃デッキから月明かりに照らされ、純白に輝くガンダムが射出される。
セシルはホープで空中に浮いたままメイン・カメラ越しに目標を発見。
迎撃をしようとするが、人とは不思議な事に体を守る鉄の装甲が薄くなっただけで決意が鈍るものである。
それはセシルも例外ではなかった。
「あっ……」
『ちょっと!?　何やってるの!?　迎撃は!?　弾頭が来るわ！』
「わ、わかってるよ！　わかってるけど……」
弾頭の迎撃に精一杯で車両に攻撃が出来ない。
「ふっ…決断力が足りないよ　ガンダムのパイロット」
デザートハンターの指揮官のサングラスの男はこれも計算の内だったかのように言う。
やがてブースターがオーバーヒート直前の為ホープは砂漠に降りる。
「えっ？　うわぁっ」
ホープの足が砂に取られて上手く動かない。
『くっ…セシル！　身体借りるわよ！』
「えっ？　ちょっセシリア!?」

言ってセシルの意識は闇へと沈んでいった。

セシリアは敵の弾頭を避けながらホープのＯＳを砂地に対応させようとキーボードを叩いていた。
「くっ…邪魔が多いわ…」
流石のセシリアも敵、それも複数の攻撃を避けながらＯＳを書き換えるなどと言う超人めいた事は簡単には出来ない。
「ごめんなさい…」
そう言ってセシリアはトリガーを引く。
しかしビームが曲がってしまう。
「なっ…やっぱり先にＯＳね…」
「(でも1人でこの数は…ロビンとペルセウスの修理はまだなの!?)」
その時緑色のビームが敵の車両を撃ち抜いた。
「セシル！　ごめん！待たせたわね」
「シオン！…さん」
「脚部の修理がまだ完璧じゃないから固定砲台として援護するわ！」
「了解」

「（よし！これで作業に集中できる！）」
　そうなると作業はサクサク進みＯＳを書き換え終えた。
「ふぅ…」
『お、終わった？』
「えぇ…どう？」
『ど、どうって……？』
「あの人達を……殺す覚悟よ」
『っ！……大丈夫　こんなことばっかセシリア任せじゃ悪いもんね…』
「別に構わないわ…でもそうね…ちょっと疲れちゃった　交代してもらえるかしら…？」
『了解だよ！』
「そう　じゃあ頼んだわね…」
　そう言ってセシリアは意識を手放した。

「覚悟を決めたよ…ごめんなさい…」
　言ってセシルはトリガーを引く。
　そしてビーム・ライフルから緑色のビームが射出され敵の車両を撃ち抜く。

「くっ……ホルン！」
セシルが叫ぶとスラストの翼から角のような浮遊物が展開する。
そしてホルンは敵の車両を囲む。
「当たって！」
ホルンの先端からビームが射出され車両を撃ち抜いた。
「ほう…覚悟を決めたかガンダムのパイロットよ……一旦撤退だ！　作戦を組み直す！」
サングラスの男が叫ぶ。
すると残った全ての車両が撤退を開始した。
「お、終わった…？」
『お疲れ様ね　セシル』
セシリアは優しく囁く。
「うん　ありがとう」
セシルは微笑むとアテナへと戻っていった。

『第１１話』　狩人の過去

???ｓｉｄｅ

俺は、初めて敵から逃げた。

それは狩人としてあってはならないと俺は思ってる。

自分の部下がそれを聞けば、

あれは戦術的撤退だ。　隊長は悪くない。

とか、

相手にはＭＳがいた。　こっちは車両とランチャーしか無いのだから仕方が無い。

とか言って、俺の事を慰めてくれるかもしれない。

でもそれは、慰めは俺にとって辛い過去を思い出させる１番されたく無いことだ。

俺は昔、コロニーに住んでいた。

家は村から町に行く道の端に建っていた。

そこでの生活は決して恵まれていたとは言えないがそれなりに楽しく、幸せな生活だった。

俺の父は町の弱小企業の一社員として働き、家族を養っていた。

母は決して多いとは言えない父の給料で上手く生計を建ててくれてた。

ただでさえ生活が苦しいのに母と父は俺を学校に通わせてくれた。

でも学校では、いつも継ぎ接ぎだらけのボロボロの服をきて、筆記用具も必要最低限の数しか持っていない俺を拒んだ。

ある生徒は俺から鉛筆や消しゴムをふんだくる。

そしてある生徒は俺の教科書を引き裂き、捨てる。

中でも1番酷かったのは、暴力だった。

毎日毎日目立たない所に連れていかれ、十数人、酷い時はクラス1つ作れる程度の人数で俺を殴り、蹴った。

体にはいくつもの痣を付けられ、その痣は服では隠せない所にまで付けられた。

その痣を見て周りの生徒は俺をそこら辺のゴミクズを見る様な目で見て、嘲笑う。

辛かった。

それでも俺は大好きな両親の前では「転んだだけ」とか、「壁にぶつかった」などと誰にでも嘘だと分かる嘘をつき、心配させない様に振舞ってきた。

しかし流石に心配になったのであろう。

両親は俺を連れて担任の先生に相談をした。

「先生」と言う職業の人間は生徒達に

「イジメはしてはいけない」

とか

「もしイジメを受けた場合は先生に相談しなさい　先生が守ってあげるから」

などとキレイ事を並べる。

俺が入学した時、俺と両親に同じ事を言った。
だから守ってもらえると思った。
助けてくれると思った。
でも現実はそんなに甘くなかった。
「イジメ？　そんなの証拠が無い以上対処できませんよぉ　第一、私が教えている生徒がそんな事する訳が無い　どうせあなたがたの息子さんがなにかしでかしたのでしょう」
この言葉で俺は絶望した。
守ってくれると思った。
助けてくれると思ったのにその男は真面目に考えてすらくれなかった。

次の日、担任に親と相談しに行った事が担任からクラスに伝えられ、イジメはエスカレートしていった。

その日も同じように目立たない所に連れていかれ、殴られ、蹴られた。
全身が軋むような音をたててる。
やっとの思いで立ち上がった俺の目の前に赤色の瞳を持ち、黒髪の少女が現れた。

俺はその時両親以外誰も信じられなかった。
その少女も俺の事を殴りに来たんだと、そう思い、睨んだ。
でもその少女は違った。
「ごめんね　私が気づいた時に君を助けに行けばこんなに傷つかなかったのに…　ごめんね」
そう言ってその場に座り込み、泣き始めた。

俺はあまりに突然の事に戸惑っていた。
「お、おい　大丈夫だから泣くなよ」
そう言って彼女の体を揺する。
「うん…うん…」
そう言ってまだ泣いている。

暫くしたら泣き止んで俺にピンク色のハンカチを渡してきた。
「これで血…拭いて？」
「あ、ありがとう」

傷口にハンカチが触れる度に軽く痛む。
「君名前はなんて言うの？」
「俺はリオ　リオ・カルティア」
「そっか！　私は―シル！　―シル・ヴ――ス！　よろしくね！リオ君！」
そう言って彼女は太陽の様な笑みを浮かべた。

俺は嬉しかった。
初めて助けてくれる人が出来たから。
今までに何度も死のうと思った。
でもいつも親が隣に来て、抱きしめてくれた。
守ってくれた。
だから今まで生きてこれた。
今まで生きててよかったってその時思えた。
でもその幸せは1日と続かなかった。

俺は走って家に帰った。
その日も両親は笑顔で迎えてくれるって、おかえりって言ってくれると思ってた。

でもその言葉を言ってくれる人は血だまりの中で倒れていた。

俺は目の前の光景を理解するのに1分ほどわかった。

そして理解した時、俺は『神』という存在が与える『運命』を呪った。

「なんで…なんで俺ばかりこんな目に会わなきゃならないんだ……　神様なんていない…こんな運命認めない…こんな世界俺が壊してやる……見てろよ神様…いつかお前を……殺してやる!!」

俺がそれを呟いた瞬間町の方で爆発が起こった。

町に様子を見に行くとそこは地獄の様だった。

地は焼かれ、そこらじゅうの建物に破片が飛び散り、その破片で人が潰れ、血だまりが出来る。

そしてその中でも大きな破片の近くで座り込み、泣き叫んでいる少女を見つけた。

その少女はお母さん、お父さんと言いながら泣いている。

恐らくあの破片の下だろう。

その少女には見覚えがあった。

それでも俺はその少女に声を掛けなかった。
そして1人の少年を抱えた統制軍や、コロニーの警察、消防とは違う制服を着た男達に頼んだ。
俺も連れていけと。

その軍は宇宙革命軍だった。
俺はそこで沢山訓練し、地球の砂漠での特殊部隊を預かる隊長になった。

そして昨日盾持ちと戦った。